

# わたしの聖戦

◎◎女性が働くといひつと◎◎ 14

医学ジャーナリスト 植田美津江

## 「色」のいろいろ

冬はおしゃれの季節だ。

コートやセーターだけでなく、手袋や帽子、ブーツやマフラーなどの小物の色や形も毎年流行が変わり、女性にとっての最大の関心事になる。知人のブティック・オーナーも、秋冬の季節になると俄然張り切っている。

しかし、これは主に女性の話。一般的にみて男性は常に紺か黒かグレーなどダークな色や決まったデザインのものしか身につけない。若い学生の中には随分おしゃれな人も見かけるようになったが、サラリーマンや社会人になると、やはりおしゃれの範囲や選択肢は狭

くなるように思える。

ようやく最近では、色とりどりのワイシャツが登場し、少し前のようにほとんどが白、という時代は終わりつつあるようだ。欧米などへ行くと、もうびつくりするくらいにビビッドな色のシャツに、これまた目が覚めるような下派手な色模様のネクタイをする人はザラにいる。欧米の男性は日本人男性に比べると体つきが大きいので、悔しいほどに柄物がキマルのである。

小さな頃、「男いろ」「女いろ」の概念が根強くあったのは私だけだろうか。誰から教えてもら

ったのかわからないが、色のなかで黒・紺・青・緑・茶色・グレーなどは「男いろ」、赤・黄色・オレンジ・ピンクなどは「女いろ」と呼んでいた。例えば男子がピンク色の服を着ていたりすると、

めでたき年齢で  
珍らしいが……  
うほは



60歳の還暦のお祝いに、ちゃんちゃんこに代表されるような赤いものを贈る風習があるが、これは赤が「魔よけ」の色であるほかに、赤ん坊に還る、という意味も含まれているらしい。今や世界一の長

寿国、60歳は祝うほどの珍しい年齢でもなくなったが、このときには男性も赤いちゃんこを着ることから、60歳を機に性差の乏しい生まれたい頃に戻

「男のくせに」とあきれたものである。男女差別といわれればそれまでだが、その頃は男女の区別は今よりはっきりしていて、個人の好みや価値観よりも見かけの性差を絶対視する傾向はずっと強かった。

話題の日本合作映画「ラスト・サムライ」が大ヒットである。映画の良し悪しはともかく、アメリカ人の、武士道に対する評価の高さや憧憬には驚

いてしまった。

この映画で衣装を担当したデザイナー、ナイラ・ディクソンは、このように述べている。

「私は深く濃い、トーンを落としたり色を使いました。それが明治時代の正しい着物の色なので」と。つまり、こういった色こそが明治の男を表現するのにふさわしいと考えたようだ。

今、日本人男性は元気を失っている。暗い色調の洋服はアメリカ人から見れば重厚で格式ある色に見えるのかもしれないが、たまには赤や黄色を取り入れてみたらどうだろうか。男性たちに最も欠けているのは「柔軟性」や「適応性」ではないだろうか。だとしたら、思い切って明るい色の服や小物を身につけることが、思わぬ気分転換になるかもしれない。

(財)愛知診断技術振興財団理事・研究所長  
イラスト・三浦義雄